

「腐ったドーナツ」

登場人物

タケオ（ギターボーカル） シェアハウスの住人。シェアハウス歴最長

兄ちゃん（ギターボーカル） タケオの実兄。ある日突然転がり込んでくる

サルー（ゲイ） 新宿二丁目で働く謎のゲイ

しずく（ヒロイン） シェアハウスにこの度引っ越してきた。みんながしずくのことを好きになる？

ノブナガ（イケメン） イケメンなのになぜか売れない俳優

アヤノ（旅人） シェアハウスの住人だが、大体旅に出ていて部屋に帰ってこない。

シェアハウスのリビングにて音楽が鳴っている
いつも賑やかなリビング
タケオとサルーがくつろいでいる
ノブナガが帰ってくる

M1 opening スカ001

ノブナガ 「あー。疲れた、今日も疲れた。」

タケオ 「おーおかえり。」

ノブナガ 「ただいまー。」

サルー 「おかえり、待ってたよ。」

ノブナガ 「どうしたの。今日はみんな、休み？」

タケオ 「どーやった？オーディション。」

ノブナガ 「・・・おう。」

タケオ 「・・・なんや、おうて。」

ノブナガ 「相手役次第だな。」

タケオ 「ふーん。まあ、ようわからんけど、お疲れさん。」

タケオ 「・・・ほな、始めよか。」

ノブナガ 「何を？」

サルー 「えーちょっとノブナガちゃん空気読んで？」

ノブナガ 「何だっけ？」

サルー 「はー、信じらんない。」

ノブナガ 「え。」

タケオ 「あほ、お前、今日はどう考えても大事な日やろ。」

ノブナガ 「何、誰かの誕生日？」

タケオ 「ちゃうわ、あほ。」

ノブナガ 「は？」

タケオ 「空気読めや、そろそろ。」

ノブナガ 「ふざけてんの？」

サルー 「はーら、ノブナガちゃん、よく見て。」

ノブナガ 「何を？」

サルー 「ダメだわ、盲目すぎる。」

タケオ 「見えへんか？ほら！！！」

ノブナガ 「え？・・・あ！！！」

リビングには一人の女性が座っている。

ノブナガ 「わー。びっくりした！え、さっきからいました？」

しずく 「初めまして。」

タケオ 「ずっとおったわ、あほ。」

サルー 「女子よ、女子。やっと新入りの女子よ！」

ノブナガ 「ああ、え、ここに住むの？」

しずく 「はい。」

タケオ 「しずくちゃん、こっちはノブナガ。」

しずく 「よろしく願います。」

ノブナガ 「え、え、ちょっと待って。」

しずく 「はい。」

ノブナガ 「住むって、どの部屋に？」

サルー 「ずっと空いてるとこ、あるでしょ。」

ノブナガ 「あ、え、でもあそこは。」

サルー 「帰ってこないよ。どうせ。今頃地球の裏側にでもいるんじゃないの。」

ノブナガ 「いやまあ、そうかも知れないけど、え、でもいつ募集したんだっけ、え。」

タケオ 「やっぱ、覚えてへんかー。まあ、俺とサルーも思い出すのに時間かかったんやけど。」

サルー 「ほら、一昨年の正月。」

ノブナガ 「一昨年？正月・・・？」

ノブナガ 「あー！！あの、酔っ払って掲示板に投稿した・・・。そんな昔のやつ、見つけた人いたんだ。」

タケオ 「そうそう、それぞれ。」

ノブナガ 「あー、なんとなく思い出した・・・。けど・・・。」

タケオ 「大丈夫やって。こんな可愛い子がここに住みたいって来てくれるんやで。断るわけないやろが！」

ノブナガ 「確かに可愛いけど。」

サルー 「とりあえず、部屋は綺麗にしといたから。」

しづく 「・・・あのー。」

タケオ 「ごめんごめん、こっちの話。」

しづく 「大丈夫ですか。」

サルー 「大丈夫、大丈夫。ごめんなさいね。」

しづく 「私、急にきちゃって・・・。」

ノブナガ 「確かに・・・。」

タケオ 「おい！いいんですよ。俺らも困ってて。ずっと一部屋空いてる状態やったんです。」

しづく 「そうですか。」

タケオ 「とりあえず、ほら、な。乾杯しよか。」

サルー 「ようこそしづくちゃん！！」

しづく 「すみません、なんか。」

タケオ 「いえいえ、ほな、かんばしい。」

タケオ、ギターを弾きだし、徐々に音楽となっていく

しずくと他の3人も打ち解けたようになる
曲の中で

しずく 「山手線の歌？」

タケオ 「アホか！環状線や！」

しずく 「ぐるぐる回る電車って。」

タケオ 「アホか！よう聞け！オレンジヤ！環状線や！」

サルー 「ごめんなさいねえ。ムキになって嫌だわあ。」

タケオ 「天王寺や。」

サルー 「みっともないよ。タケオちゃん。」

タケオ 「何ゆうとるねん！お前の地元は線路が回るほどのスペースないやろが。」

サルー 「もうっ。」

しずく 「なんかごめんなさい。」

タケオ 「冗談や。はは。」

サルー 「はは。」

しずく 「じゃあ、来週から。」

タケオ 「おう。来週とか言わんと、別に明日からでもえーんやで。」

しずく 「そんな。」

サルー 「いいわよ。早くても遅くてもお家賃は一緒だから。」

しずく 「じゃあ、早めに越して来ちゃおうかな。」

タケオ 「そうしいそしい。」

サルー 「なに、早く越してきた理由でもあるの。」

タケオ 「やめるや、サルー。女の子のプライバシーやぞ。」

ノブナガ 「にしても、本当に可愛いね。幾つ？」

タケオ 「こら、ノブナガ。油断も隙も無いな。」

タケオ 「・・・で、いくつなん。」

しずく 「ははは、幾つに見えますか？」

サルー 「ちよっと、あなたたち！」

しずく 「ありがとう、サルーさん。」

サルー 「で、幾つなの？」

しずく 「そうだなあ・・・。サルーさんだったら言ってもいいかな。」

しずく、サルーに耳打ちをする

サルー 「エーーーーー！」

しずく 「言っちゃダメですよ。」

少しの間その場から動くことのできないサルー

サルー 「冗談がきつすぎるわ。」

しずく 「ふふふ。」

サルー 「あーなんか、酔っ払っちゃった。酔ったのかな。酔ったのね。え、ほ、本当に。」

しずく 「本当です。」

サルー 「あー、もう。本当に酔ってきちゃった。」

タケオ 「おう、俺も。」

ノブナガ 「で、幾つなの？」

しずく 「しつこいですよ、ノブナガさん。」

ノブナガ 「失礼。」

しずく 「じゃあ、私はこれで。」

サルー 「こんな時間に女子一人で帰るの？」

しずく 「終電、まだ間に合うんで。」

タケオ 「危ない。それは危ないわ。」

ノブナガ 「そうだな。ここに泊まって・・・」

しずく 「いえ、大丈夫です。」

サルー 「じゃ、せめて駅まで。」

しずく 「本当に大丈夫です。」

しずく 「あ、タケオさんワールドベースボール、始まっちゃいますよ？」

タケオ 「おおー、ほんまや！ほな、しずくちゃん、気をつけてな！」

サルー 「女子より野球なの。」

ノブナガ 「じゃあ、気をつけてね。」

しずく 「はい。」

サルー 「私もそろそろ出勤準備っと。」

しずくは去り、それぞれも部屋に戻る

みんなが去ったあとそっとしずくが戻ってくる

しずく 「戻ってこれた。」

しずく、静かに去っていく

転

3 デイレイ

リビングにはノブナガとタケオ

タケオ 「いいわー。しずくちゃん。可愛いわー。なんであんな可愛い子がこんな野郎ばかりのシェアハウスに。やっぱり俺らの日頃

の行いやな。神様からのご褒美や。」

ノブナガ 「すっかり忘れてたよ。あんな投稿をしたこと。」

タケオ 「俺もやねん。」

ノブナガ 「まあ、2年以上も前のことだしな。・・・てことは、あいつももう2年以上帰ってきてないってことか。」

タケオ 「そう言うことになるな。」

ノブナガ 「彼氏追いかけてアフリカに行ったんだっけ。」

タケオ 「そうそう、まあ別れたらしいけどな。」

ノブナガ 「そうなの？」

タケオ 「せやで。最初の頃は俺もあいつとスカイプで話したりしてたから。」

ノブナガ 「今は何してるのか、わからないままか。」

タケオ 「うん。」

ノブナガ 「まあ、何かあればニュースになったり、家族から連絡があったりするだろうから、何事もなく元気でやってるんじゃないかな。」

タケオ 「ほんまやな。まあ、今更帰って来られても、しずくちゃん入れちゃったし、めんどくさいんやけどな。」

ノブナガ 「一応メール入れておいたら。」

タケオ 「せやな。まだ生きてるんやろか、あのアドレス。」

ノブナガ 「わからないけど。」

突然兄ちゃんが入ってくる

兄ちゃん 「ピンポーン！」

ノブナガ 「え。」

兄ちゃん 「おい、なんやこの家、チャイム壊れてるぞ。」

ノブナガ 「は。」

タケオ 「兄ちゃん!!??」

兄ちゃん 「おお! タケオ!! 来たで!

タケオ 「来たでやあらへん! 何してんねん!」

兄ちゃん 「おう、タケオ、単刀直入に言う。」

タケオ 「なんや。」

兄ちゃん 「泊めてくれ。」

タケオ 「あかん。」

兄ちゃん 「住まわせてくれ。」

タケオ 「もっとあかん。」

兄ちゃん 「ほな、匿ってくれ！」

タケオ 「嫌じゃ。」

兄ちゃん 「なんでやタケオ、兄ちゃんの頼み聞けへんか？」

タケオ 「アホか。」

兄ちゃん 「お前、シェアメイトが一人帰ってこんくて、一部屋余ってるようなもんやってブログに書いとったやないか。」

タケオ 「なに人のブログ勝手に見てんねん！気持ちわる！」

兄ちゃん 「ええやないか！ブログはあれやろ、不特定多数の人に向けて発信しているもんなんちゃうんかい！兄ちゃんかて、不特定多数の一人やないか！」

タケオ 「不特定多数の一人をうちに泊まらせたりできひん！」

兄ちゃん 「そんなこと言うなやー。なあ、タケオ。」

タケオ 「それに、あの一部屋はつい昨日埋まってしもたんや。」

兄ちゃん 「ええええええ！嘘やろ？まじで？なあ。まじで言ってるんか？タケオよ、なあ？！」

タケオ 「何をそんなに慌ててんねん。」

兄ちゃん 「俺・・・アパート売ってもうた。」

タケオ 「はああああああ？」

兄ちゃん 「ごめん、タケオ！」

タケオ 「お前なにやってんねん！そんなことしたらうち、うちの資産なんもなくなるやろが！」

兄ちゃん 「・・・。」

タケオ 「なんでやねん？！」

兄ちゃん 「・・・借金や。」

タケオ 「はああああああ？」

兄ちゃん 「だから、なつ。頼む。一晩だけでもええから、泊まらせてくれ！」
タケオ 「……」

サルーも出て来ている

サルー 「泊まらせてあげたら？」

タケオ 「わっ。お前急になんや。足音せえへんな。」

ノブナガ 「困ってるみたいだし。」

タケオ 「ノブナガ、お前まで。」

サルー 「タケオちゃんの部屋、一番大きいし。」

タケオ 「え、俺の部屋で寝んの？嫌や、兄ちゃんと一緒にとか。」

兄ちゃん 「タケオくん、頼む！！！」

タケオ 「リビングで寝ろよ。」

兄ちゃん 「そんなん、迷惑やろう。他の人に。」

タケオ 「ええ。」

サルー 「タケオちゃん。」

ノブナガ 「タケオ。」

兄ちゃん 「タケオ。」

タケオ 「ああああもう！わかったわ！けど、住むところ決まったら出て行くんやぞ！ほんで、後から詳しく聞くからな！」

転

㊦4 バファローズ応援歌

タケオの部屋でギターをかき鳴らし、気持ち良さそうに歌う兄ちゃん

曲の中でタケオが帰って来る

タケオ 「わ、またギター弾いて、歌って。また、飲んでたんか。もー、近所迷惑やで、兄ちゃん。」

兄ちゃん 「おうタケオ、おかえり！この家いいなあ。明るいし、広いし、あったかいし。なんかいっぱいおるし。兄ちゃん気に入ってしもたわ。」

タケオ 「はあ？なあ、今日何しとったん？」

兄ちゃん 「ん？」

タケオ 「や、だから今日は何してたんか聞いてんねん。」

兄ちゃん 「うーん。だらだら？」

タケオ 「ああ？」

兄ちゃん 「だーらだら？」

タケオ 「可愛くゆうてもあかんわ、あほ。なんやねんな。」

兄ちゃん 「ごめんなさい。」

タケオ 「素直やな。もう住むとこ探しせえやう。もう。ほら。」

兄ちゃん 「おおうタケオ、ありがとう！」

タケオ、兄ちゃんに弁当とビールを渡す

M5 タケオと兄ちゃんの歌 「ぶらぶら」

曲中で

タケオ 「なあ、兄ちゃん。」

兄ちゃん 「なんやタケオ、かしまって。」

タケオ 「あんな、しづくちゃんのことやねんけど。」

兄ちゃん、突然演奏をやめる

タケオ 「止めんな、止めんな。弾いといけ。」

兄ちゃん、ギターを再びならす

タケオ 「あんな、しずくちゃんさあ・・・。」

兄ちゃん、再びギターを止める

タケオ 「だから止めんなって。もー。」

兄ちゃん 「なんや、なんのことや、兄ちゃんにゆうてみ。しずくちゃんて新しくこの家に入った子やろしずくちゃんがどうしたんや。」
タケオ 「あんな、しずくちゃんってな、俺のことす・・・。」

兄ちゃん突然ガムシヤラにギターをかき鳴らす

タケオ 「なんやねん。もう。」

兄ちゃん 「なんやー？タケオー？聞こえへんかったぞお。」
タケオ 「もうえーわ！」

兄ちゃん 「えー？」
タケオ 「うっさいねん！！」

兄ちゃん、ピタッとギターをやめる

兄ちゃん 「タケオくん。」

タケオ 「なんや。」
兄ちゃん 「ちよっと散歩してくるな。」

タケオ 「おう・・・って仕事探せよ。」

兄ちゃん足早に出て行く

タケオ 「っておい！」
タケオ 「・・・。」

タケオ、おもむろにギターを取り出し、しずくへの想いを歌い出す

M6

タケオのラブソング 「そんなこと言わない君が好き」

*曲中でしずくが出てくる。ぼんやりと辺りを見回し、ゆっくり一つ一つを確認している。

しずく 「ここが、リビング。ここが、私の部屋。ここがえっと、トイレ。」

しずく 「えっと、サルーさんと、ノブナガさんと、タケ・・・シさん。」

タケオ 「えー。」

しずく 「あ、タケオさんだ。」

タケオ 「ふー。」

しずく 「それから、私が、しずく。」

タケオ 「うっわー。かわいい。」

しずく 「あと、これが、テーブル。」

タケオ 「え。」

しずく 「それから、これが、椅子。」

タケオ 「は。」

しずく 「座るところ。または、腰掛けるところ。」

タケオ 「なんや、不思議ちゃんか。」

しずく 「あ、タケ・・・。」

タケオ 「・・・。」

しづく 「タケ……」

タケオ 「……」

しづく 「タケオさん。」(同時に)

タケオ 「タケオや。」(同時に)

しづく 「ごめんなさい。私、物覚えが悪くて。」

タケオ 「え、いや、え……いやいや、えーよ。そうやんな。いきなりこんなに登場人物増えたら覚えられへんよな。」

しづく 「上手にやるので。」

タケオ 「え。」

しづく 「え、あ、いや。徐々に覚えるので。」

タケオ 「あーせやんな。どんな小悪魔かとおもったわ。」

しづく 「コアクマ？」

タケオ 「いや、いや。こっちの話。」

しづく 「タケオさん。」

タケオ 「うん？」

しづく 「これは、冷蔵庫。」

タケオ 「……」

しづく 「タケオさん？」

タケオ 「なんや、しづくちゃんって違う星から来たみたいやな。」

しづく 「あ、サルーさん。」

サルー、出てきている

サルー 「あ、ねえ、しづくちゃん、ちょっといい。」

しづく 「はい。」

しづく 「じゃあ、タケオさんは、出て行ってください。」

タケオ 「言うね。」

しずく 「ごめんなさい。」

タケオ 「ええよええよ。サルー、なんの話や。」

サルー 「女同士の話よ。」

タケオ 「お前は中途半端やろ！」

しずく 「タケオさん！」

タケオ 「え？」

しずく 「空気読んでください！」

タケオ 「は?!」

しずく 「今からサルーさんとお話があるんです。」

タケオ 「わかった。わかったよ。」

しずく 「ありがとう。」

タケオ 「いちいちかわいいな！」

サルー 「ごめんね、タケオちゃん。」

タケオ 「なんやねん君ら。気持ちわるっ。」

サルー 「傷つくわ〜。」

タケオ、サルーに急かされながら去っていく

サルー 「で、しずくちゃん、あの話よ。」

しずく 「はい。・・・って、そんなに大ごとですか？」

サルー 「私本当にびっくりしたんだけど！」

しずく 「ごめんなさい、驚かせちゃって。」

サルー 「嫌いじゃないけどさ、そういうの。だけど、こんなにナチュラルなのは初めてだったから。」

しずく 「ですよね。」

サルー 「で、いつからなの。」

しずく 「えっと、ちょうど半年になると思います。」

サルー 「半年も？」

しづく 「はい、結構大変でした。」

サルー 「みんながみんな？」

しづく 「見えてるわけじゃないんです。」

サルー 「なるほど。じゃ、この連中は、」

しづく 「ちよつと普通じゃないかもです。」

サルー 「ちよつと・・・だいぶんよね。」

しづく 「でもサルーさんは」

サルー 「え、なに。」

しづく 「最初の方からわかっていましたよね。なんとなく。」

サルー 「ま、まあね。なんかいるなうってそのくらいよ。私はほら。あれだから。」

しづく 「あれ？」

サルー 「半分半分なのよ、中途半端。」

しづく 「そう。類は友を呼ぶっていうじゃない。だから、私の周りも中途半端ばかり。だからさ。」

しづく 「・・・。」

サルー 「そういう奴らの中には、つて私もそうだけど、妙に考え込んじゃうっていうか、変な気を起こし出すやつがいるわけよ。そりゃそうよね、普通が普通とされているこの国じゃ、生きづらいつたりやありやしな。だからね、ほら。」

サルー、自分の太ももを見せる

しづく 「あ。」

サルー 「ね。」

しづく 「太もも、なんですね。」

サルー 「手首は目につきやすいから。」

しづく 「そうですか。」

サルー 「でもね、中にはさ、本当にやっちゃやう奴もいて。そしたらさ、感じるわけよ色々。だからしづくちゃんみたいな見えていても、初めはびっくりするけれど、ある程度普通に受け入れられるっていうか。」

しづく 「そうなんですネ。」

サルー 「まあ、あんなにナチュラルに溶け込んで、突然カミングアウトされたら驚くけどね。」

しづく 「ごめんなさい。」

サルー 「戻ってきちゃったのねー。かわいいそうに。」

しづく 「かわいいそうじゃないですよ。」

サルー 「え、そうなの。」

しづく 「サルーさん、それはフィクションです。みんながみんなかわいいそうな訳ないですよ。」

サルー 「そうなんだ。」

しづく 「少なくとも私は、今、全然ハッピーな気持ちでここにいますんで。大丈夫です。」

サルー 「あらそう〜。」

ノブナガやってくる

ノブナガ 「さむっ！さむっ！」

サルー 「どうしたの、ノブナガちゃん、大丈夫？」

ノブナガ 「いやいや寒い！ああ、なんかゾクゾクする。」

サルー 「なに、ノブナガちゃん、風邪？」

ノブナガ 「おお、なんだか悪寒がしてきた。」

サルー 「やだ、風邪じゃない。」

しづく 「大丈夫ですか。」

サルー 「ほらちよっと、熱があるかも知れないわよ。」

ノブナガ 「なに、サルー、一人で喋ってるの。」

サルー 「え。」

しづく 「あ。」

サルー 「ごめんなさい。」

しづく 「大丈夫です。というかこれが普通です。」

サルー 「そっか。」

ノブナガ 「ちよっと、休むわ。なんかおかしかったんだよなー。この間のオーディションから。なんかもらってきたのかなあ。」

ノブナガ 「さっむ。本当に寒い。」

しづく 「ここを出たら、大丈夫かも。」

ノブナガ 「じゃーな。おやすみ。」

ノブナガ、出て行く

ノブナガ(声) 「あれーこっちの部屋、全然寒くない。」

しづく 「ほらね。」

サルー 「・・・。」

しづく 「サルーさん？」

サルー 「ガチなのね。」

しづく 「ガチです。」

Σ7 ガチなのね 「スカ速いやつ」 (しづく・サルー)

*しづくとサルーの掛け合いになるのが望ましい

(サルー) ね ガチなのね ガチなのね 嘘 からかってるんじゃない

(しづく) そう ガチなのです ガチなの リアルに そう 私はここにいる

(サルー) あたしがあんななら すぐ それを 白状してるかも

(しづく) あなたがしづくなら 今 すぐに 誰に会いたいの

(サルー・しづく)

ね ガチなのね(です) ガチなのね(です) ガチなの (しづく) ほんとよ
そう ガチなのです(ね) ガチなのです(ね) ガチなの (しづく)「信じて」

ね ガチなのね(です) ガチなのね(です) ガチなの (サルー)「信じるわ」

(サルー) 誰に会いにきたの ねえ ほんとに辛くはないの

(しづく) 一人の友達に そう どうしても会いたくて 辛くない

(サルー) どこにいるの

(しづく) どこにいるか

(サルー) どこにいるの

(サルー・しづく) どこにいるの(か)

≧8 ライブ*役者なし

暗転

暗転中、ドアを叩く音

アヤノ 「ちよっと〜！誰か〜？留守〜？インターホン壊れてるんだけど！」

アヤノ 「え、あ、嘘？」

アヤノ 「もうちよっと〜危機感なさすぎ〜鍵空いてるんだけど〜！入りますよ〜？入りますよ〜！入るよ〜！」

明転

部屋には兄ちゃん

アヤノが入ってくる

アヤノ 「おお、変わってない、変わってない。」

アヤノ 「え、誰あんた。」

兄ちゃん 「あ、えっと。」

アヤノ 「不審者!!!!」

兄ちゃん 「違います!!!」

アヤノ 「不審者!!!!!!!」

兄ちゃん 「やから違うって!!!」

アヤノ 「ちかよらないで!!!!通報するよ!!」

兄ちゃん 「つ、通報だけは!!!勘弁を!!」

アヤノ 「やっぱり不審者だ!キヤーーーー!誰かーーーー!」

ノブナガが登場する

ノブナガ 「どうしたどうした?!わ、うわ!!!わーーーー!!!」

アヤノ 「ノブナガーーーー!」

ノブナガ 「アヤノ!!!!」

タケオ、サルー出てくる

タケオ 「おおおお!!!」

サルー 「まあああ!!!」

アヤノ 「ひっさしぶりー。」

タケオ 「アヤノ、お前何してんねん!」

アヤノ 「帰ってきた!」

タケオ 「はああああ?!」

サルー 「生きてたの?ねえ、生きてたの?」

アヤノ 「うん。生きてた!!」

アヤノ 「あ、れ。みんな、引いてる？」

アヤノ 「ちょっと待って、説明する。」

アヤノ 「はい、ほら、いつもの。」

一同 「は？」

アヤノ 「ほら、位置について。」

一同、楽器スペースへ

サルーは指揮者

Σ9 アヤノの旅路 「フォーク(同期)」 (アヤノ)

「そうそう、これこれー!」

「やっぱいいね〜。」「たまらないね〜」

「じゃ、歌うよ〜」

旅に出てきたわ たった一人でね

愛しい彼の元へ ただ ただ 行きたくて

旅に出てきたわ トランク一つで

行き先はどこか 遠く 遠く 切なくて

会った途端 しまった と 感じた ここは アフリカ

会った途端 違うと 感じた でも引き返せない

「だってあんなに啖呵切ってでてきたんだよ! 親とも喧嘩してさ! 引き返せないじゃん。」

昔から私 一直線な子で

誰のいうことも聞かなかった そうアヤノ

一人大陸を 渡って気付いた

大海原に出ても私は そうアヤノ

打ち勝つよ アヤノ 今 一人で生きるわ

むしろ得よ だって今 なんのしがらみもない

見上げた空 星が綺麗だね あの星のしずくを

一粒でも 一粒の意味でも 君に伝えられたら

急に襲った 不安と 寂しさ

私は 一人だ

誰と話そう なんも手段も

全部 繋がらない

急に決めた この旅で 得たもの たくさんあるけど

急に消えた たくさんの 物語の続き

タケオ 「知らんわ！」

アヤノ 「えへ。」

タケオ 「えへやあらへん！」

兄ちゃん 「ほんまや！気持ちよく演奏してもたけど！」

タケオ 「え、ほな、完全に？」

アヤノ 「えへ、帰ってきちゃったー。だって急に寂しくなっただけ。どうしようもなく寂しくなっただけ。」

タケオ 「自分勝手か！お前なあ。まあ、無事でよかったけど。」

アヤノ 「アイアム自由人！でさ、あの・・・誰？」

兄ちゃん
「ああ、紹介が遅れました。えっと、タケオの兄ちゃんです。」

アヤノ
「ああ、お兄さん。御免なさい、私、不審者呼ばわりして。」

タケオ
「こいつもアヤノに負けんくらいの自由人やで。」

兄ちゃん
「こら、タケオ！兄ちゃんをこいつ呼ばわりすんな！」

タケオ
「ある日突然転がり込んできよった！」

アヤノ
「あ、じゃあ私の部屋に？」

タケオ
「いや、俺の部屋にいる。」

アヤノ
「そうなの？なんだ、使ってくれていいのに！」

タケオ
「いや、その・・・。」

アヤノ
「ん？」

ノブナガ
「いや、その・・・アヤノの部屋なんだけど。」

アヤノ
「なに、誰かに貸しちゃった？いいよいいよ、私リビングで寝るから。」

ノブナガ
「あーもー本当にアヤノちゃん、こういうキャラでよかったわー。」

サルー
「本当本当、アヤノちゃん、変わってなくて嬉しい！」

タケオ
「わかってたで、俺はずっと、アヤノちゃんを信じてたで。」

アヤノ
「なにみんなして急に気持ちわる。それに私行くところあるんだ。急に帰ってきた割に行きたいことがあつてさ。」

タケオ
「え、あ、そうなん？」

アヤノ
「うん。無計画なアヤノちゃんなりに、考えてることはあるんだ。だからちよつとの間だけ泊めて。リビングで寝るから。」

タケオ
「おう。なんかよく分からへんけど、わかった。あ、せや今アヤノの部屋にいる子なんやけど。」

ノブナガ
「本当だ、紹介しておこう。」

サルー
「とっても可愛い子よ。」

アヤノ
「女の子？」

サルー
「そう。」

アヤノ
「へー。」

ノブナガ
「ちよつと、サルー、呼んできて。」

サルー
「わかった。」

サルー、しずくを呼びに行く

タケオ 「てか、こんなにリビングがドタバタしとったら聞こえてると思うけど。」

アヤノ 「壁薄いしね！」

タケオ 「はは。」

ノブナガ 「はは。」

兄ちゃん 「はは。」

タケオ 「おい、サルー。」

サルー戻ってくる

サルー 「いない。」

タケオ 「は。」

サルー 「いなくなっちゃった。」

ノブナガ 「え。」

タケオ 「あれ、玄関の音した？」

サルー 「わかんない。」

ノブナガ 「こんな時間に。」

アヤノ 「そういえばさっき、鍵、開いてたよ。」

ノブナガ 「どこに行ったんだろう。」

タケオ 「てか、いつの間に？」

サルー 「・・・ま、戻ってくるでしょう。大人なんだし。心配ないわよ。」

タケオ 「せやな。サルー、一応、しずくちゃんに電話しといて。」

サルー 「知らないのよ、私、あの子の番号。」

タケオ 「えー。誰か知らんの？」

ノブナガ 「知らない。」

兄ちゃん 「知らない。」

タケオ 「そのまま兄ちゃんは知らんやろうけども。」

タケオ 「・・・あ！」

タケオ、パソコンを開く

タケオ 「ここにあるんちゃうん。個人情報・・・ないわ。」

サルー 「そうよねー。」

タケオ 「電話番号だけじゃない。住所も書いてないわ。うわ、気づかへんかった。この子、どっから来たんや。」

ノブナガ 「本当に知らないの、サルー。」

サルー 「ま、大丈夫よ。きっと。」

タケオ 「せやな。」

サルー 「ほら、アヤノも帰って来たところだし。」

兄ちゃん 「おーやるか！」

タケオ 「あんた、一番関係ない。」

アヤノ 「いいじゃんいいじゃん、タケオのお兄さん、超面白いね！」

タケオ 「お恥ずかしい限りです。」

ノブナガ 「じゃ、俺明日早いから。」

タケオ 「だから、そういうところがあかんねん！！！」

兄ちゃん 「ほら、タケオ。」

兄ちゃん、タケオにギターを渡す

タケオ 「おう！」

ノブナガ 「なに、この連帯感。」

タケオ 「兄弟ですから。」(同時に)
兄ちゃん 「兄弟ですから。」(同時に)

Σ10 焼酎

曲中で

アヤノ 「ヤッホー!いつものやつだ!」
ノブナガ 「あゝ、じゃあ、あと一杯だけ。」

曲中、みんなが歌って踊っている間、しずくは出て来たり、消えたりを繰り返す。
気づくサルー
何か悪寒を感じるアヤノ

Σ11 ライブ*役者なし 不機嫌な月

転

サルー一人で座っている

サルー 「あつたま痛いわあ。」

サルー 「え、うん。そう。二日酔い。」

サルー 「あーダメダメさすらないで。ああ、いや、あの、ありがとう。でも・・・あー気持ちわる。」

アヤノバスタオルを持って出てくる

アヤノ 「なにサルー、一人で喋ってるの。」

サルー 「あーアヤノ、なにあんた平気なの。」

アヤノ 「サルーこそ、まだ酔ってるの。」

サルー 「バッチリ二日酔い。」

アヤノ 「日本の酒なんか全然だよ。一回アイスランドでウォッカストレートで飲まされた時、気付いたら道端だったよ。」

サルー 「どんな旅してるの、あんた。」

アヤノ 「あはは。」

サルー 「・・・。」

アヤノ 「大丈夫。」

サルー 「あんたさあ、なんで帰って来たの。」

アヤノ 「え。」

サルー 「なんかあったんじゃないの。」

アヤノ 「いやあ。」

サルー 「ま、いいわ。話したくなったら話しなさいよ。」

アヤノ 「ありがとう。」

サルー 「え、ああ。はいはい。」

アヤノ用事が済んだら出て行く（水を飲む、など）

サルー 「はあ。ねえ。わかっちゃうってのもねえ。なんだかねえ。」

Σ12 サルーの秘密（インド）

*サルーは曲中で、目に見えないものと話したりコミュニケーションをとっている

サルー 「半分半分。あーなんて中途半端。え、わかってるわよう。もう。はいはいまたね。え、出てこないでって言っても出てくるでしょう。」

サルー 「ええ、ええ。大丈夫。こういう奴の方が話しやすいでしょう。」

しづく、入ってくる

しづく 「お友達ですか。」

サルー 「いやー、わからない。誰なのかわからない奴までやってくる。」

しづく 「優しいんですね。サルーさん。」

サルー 「いやー、ありがとう。」

ノブナガ、帰ってくる

サルー 「おかえり、ノブナガちゃん。」

ノブナガ 「ただいまー。あ、しづくちゃん戻ってきたんだ。」

しづく 「え。」

サルー 「あら、今日は見えてるのね。」

ノブナガ 「え。」

サルー 「いやいや。さっき戻ってきたのよ。」

ノブナガ 「どこ行ってたの、あんな時間に、危ないよ。」

しづく 「近い、近いです、ノブナガさん。」

ノブナガ 「ああ、ごめん。」

サルー 「ほんと、近い近い。」

ノブナガ 「はー、つつたく。疲れたよ。今日の現場。2時間待ちの出演時間2分。」

サルー 「なにそれ。」

ノブナガ 「あーくそ。」

しづく 「ノブナガさん、俳優さんなんですか。」

ノブナガ 「俳優さんなんです。あーあ。」

サルー 「拗ねないの。」

ノブナガ 「わっかんないんだよなー。」

サルー 「なにが。」

ノブナガ 「役に、なりきるとか。役を、生きるとか。」

サルー 「え。」

ノブナガ 「『だからお前はダメなんだ！この大根が！』って言われても、なにがダメなのがわからない。」

サルー 「あら、センチメンタルブルース？」

しづく 「ブルース？」

サルー 「いいの、ごめんね。」

ノブナガ 「だからさ、『お前の好きなようにやれ。好きなように表現してみろ。』って言われてもさ、好きな表現なんてないわけ。なにをしたらいいのかがわからない。」

サルー 「・・・なんで俳優やってんの。」

ノブナガ 「モテたいから。」

サルー 「即答。」

ノブナガ 「誰かさんと一緒だよ。」

サルー 「あら、聞こえたら大変よ。」

ノブナガ 「いいよ、別に。誰かさんと一緒だ。」

タケオ、出てくる

タケオ 「どーせ俺のことやろが！」

ノブナガ 「おお、いたの。」

タケオ 「ええか、ノブナガ、俺はお前とは違う、もう、全然違う。」

サルー 「ちよっと、タケオちゃん。」

タケオ 「あんな、これだけは言わせてもらおうわ。俺はな、お前みたいにフラフラなんのこっちゃよー分からんことしながら毎日過ごしてるわけやない！ちやんと仕事もしながら、その上で、音楽やってんねん！」

ノブナガ 「俺もやってるし。」

タケオ 「(食い気味に) バイトやろが! 単発の!」

サルー 「なに、なにに、なんでそんなカリカリしてるの。」

タケオ 「うっさいねん。あーもーどいつもこいつも! おい! 兄貴!」

兄ちゃん、後ろに立っている

兄ちゃん 「・・・!」

タケオ 「そこで盗み聞きしてるんは知ってんねん!」

兄ちゃん 「はい!」

タケオ 「はよ仕事探せや。野球見たり、ギター弾いたりばっかしてへんと!」

兄ちゃん 「すいません。」

タケオ 「はー。すっきりした。」

サルー 「溜まってたのねー。」

タケオ 「俺あかんねん。コップが満タンになったら爆発させてまう。裏も表もないねん。あ、しずくちゃん!」

しずく 「あ、こ、こんにちは。」

タケオ 「いつ帰ってきたん。危ないで。」

しずく 「大丈夫です。」

タケオ 「あ、せや、あんな紹介するわ。あれ、あいつどこ行ったんや。」

ノブナガ 「本当だ、リビングで寝るって。」

しずく 「あいつ?」

ノブナガ 「あの、いや。」

タケオ 「ここはもうホンマのこと話した方が。」

兄ちゃん 「せやな。」

タケオ 「お前が入ってくな。」(同時に)

ノブナガ 「ちよっと黙ってて。」(同時に)

サルー 「なに、ひつついたり離れたり。」

ノブナガ 「あの、えっと、しずくちゃんの前にしずくちゃんの部屋に住んでた奴がいて。」

タケオ 「えーっとその、なんかの手違いで、も、戻ってきたもーたんやわ。」

ノブナガ 「あ、だけど全然きになんかなくて、あいつ、すぐに出て行くって言ってたから。」

タケオ 「そ、そうや。やからちよっと間、リビングに泊めてやってくれへんかなあ。」

しずく 「はい。」

タケオ 「ほんで、あいつはどこいったんや。」

シャワーの音がする

サルー 「シャワーね。」

シャワーの音がやむ

サルー 「あ、止んだ。」

アヤノの声が近づき、やがて喋りながらアヤノがバスタオルを頭に巻いて登場する

アヤノ 「あー！さっぱりしたー。シャワー変えたんだねー。前より水の出が良くなった気がする。あれ？でもそれってあれか、私がそう思うだけかも。海外のシャワーってほんとどれもカスだからさあ、日本でお風呂入るとほんと、生き返るよねーだって・・・。」

アヤノ、登場し、しずくと目が合った瞬間倒れる

暗転

≧13 ライブ スカインスト*役者なし

ノブナガ 「アヤノ、おい。アヤノ。」

明転

アヤノ 「あ。」

タケオ 「のぼせただけか。大丈夫か。」

ノブナガ 「水、飲む？」

アヤノ 「……違う。のぼせたんじゃない。」

サルー 「ちよっと皆さん、どいてあげて。」

みんながどいた後ろにはしづく

アヤノ 「……。嘘でしょ。」

しづく 「戻ってきちゃった。」

アヤノ 「は。」

しづく 「アヤノ。」

アヤノ 「どういうこと。」

しづく 「今日は見える？」

アヤノ 「え。」

しづく 「みなさんも、今日は、見える？」

一同 「……。」

しづく 「サルーさんは、見えますよね。」

サルー 「しづくちゃん、ゆっくりね。」

しづく 「はい。」

アヤノ 「しづく……。」

しずく 「この世界のことを認識するのに時間がかかっちゃった。私の名前はしずく。あと、このへんのものも、全部忘れていたみたい。これは、椅子。」

タケオ 「ああ。」

しずく 「タケオさん。」

タケオ 「天然じゃなかったんか。」

アヤノ 「本当に、しずくなの。」

しずく 「そうだよ。」

アヤノ 「半年前に」

しずく 「死んだしずくだよ。」

兄ちゃん 「は？」

タケオ 「は？」

ノブナガ 「え？」

タケオ 「どういうこと？」

ノブナガ 「死んだって？」

兄ちゃん 「なんや、姉ちゃん、幽霊ってことか。」

タケオ 「はあ???!」

アヤノ 「・・・本当にしずくなんだ。」

しずく 「うん。」

アヤノ 「しずく。」

しずく 「そうだよ。」

アヤノ 「・・・本当は死んでなかったとか。」

しずく 「死んだよ。」

アヤノ 「だっているじゃんここに。」

しずく 「死んだよ。」

アヤノ 「死んでないよ!!」

しずく 「死んだんだよ。」

アヤノ 「死んでないよ！生きてるんだよ。」

しずく 「死んでるんだよ。」

アヤノ 「じゃあなんているの。」

しずく 「じゃあなんで見えなかったの、昨日。」

アヤノ 「は。」

しずく 「焼酎のみた〜い。」

兄ちゃん 「焼酎のみた〜い。」

タケオ 「ノンな。」

しずく 「いい歌ですよね、大好きになっちゃった。」

兄ちゃん 「それはどうも。」

アヤノ 「昨日。」

しずく 「うん。」

アヤノ 「見えなかった。」

しずく 「だから、この身体、ってか、今身体はないの。」

アヤノ 「は？」

しずく 「皆さんが、見えてるのは、しずくっていう人の身体じゃない。なんとなく、ぼんやり、しずくっぽい名残が見えてる気がしているだけ。」

アヤノ 「なに言ってるの？いるじゃん、ここに。」

ノブナガ 「あれ、しずくちゃんどこ行った。」

アヤノ 「え。」

しずく 「ノブナガさんは一番普通ですね。というか一番死が遠い。」

ノブナガ 「トイレ？」

ノブナガ、トイレに探しに行く

アヤノ 「死が遠いって？」

しずく 「信じてないんだよ。多分身近な人が亡くなったことがないんだと思う。タケオさんやお兄さんは見えますよね。」

タケオ 「うん。あ。」

兄ちゃん 「そうやな。」

アヤノ 「なに。」

兄ちゃん 「あんな、俺ら、小さい頃に親亡くしてんねん。」

タケオ 「兄ちゃん。」

兄ちゃん 「ゆうたれゆうたれタケオ。」

「まあ、こんなん良くある話やからなんも珍しいことじゃないんやけど、昔親亡くしてな、そこから二人でやってきた。親がアバウト残してくれたからさ、資産があったからなんとかやってこれたんや。まあ、どっかの誰かさんがそれ売ってもうたんやけどな！」

兄ちゃん 「それは、すまんって。」

「まあええわ。今この話は。物はいつかなくなるしな。いや、ほんでな、俺らよくやってん、な。」

兄ちゃん 「おう。」

「何を。」

タケオ 「幽霊呼ぶねん。」

「は。」

タケオ 「あほみたいやろ。でもな、真剣にやってたな。困った時、寂しいとき、兄ちゃんと手繋いでな。お父さん、お母さん、でてきてやーって。」

「・・・。」

タケオ 「いっぺんも出てこうへんかったけどな。いっぺんも会われへんかったけどな。」

「・・・。」

タケオ 「でも、なんか不思議なことが起こったり起こらなかったり。」

「・・・。」

タケオ 「懐かし。」

「来ていたと思いますよ。ご両親。」

タケオ 「かも知れへんな。ああ、だからしづくちゃんのことが見えるんか。」

「ですね。」

しづく 「サルーさんも、見えていますよね。」

サルー 「はい。見えますよ。」

しづく 「よかった。」

しづく 「ウンウン。いないから。むしろ会いに来るから。」

アヤノ 「良かったー!!」

しづく 「本当にー!!」

アヤノ 「ねえ、なんで死んだの。」

しづく 「嫌だったのかな。なんだろ。」

アヤノ 「まあ、聞いたって仕方無いかー!!」

しづく 「ふふ、うん。ありがとう。」

ノブナガ、帰ってくる

ノブナガ 「あれーえ? しづくちゃん?!」

しづく 「あ、ノブナガさん。」

ノブナガ 「なに、瞬間移動?」

しづく 「したのかも知れませんがね。」

ノブナガ 「なに、みんなこっち向いて。」

タケオ 「いやー。」

アヤノ 「ま、ノブナガも分かる日がくるよ。」

タケオ 「せやな。」

ノブナガ 「は?」

タケオ 「やばー、俺今めっちゃお前に勝った気分やわー。」

ノブナガ 「はあ?」

兄ちゃん 「ええやないか、ほら、タケオ。」

タケオ 「おおくまじか。」

曲中で

アヤノ 「なんかさっきまで飲んでた気もするけど。」

タケオ 「ええやないか。こんな日くらい。」

ノブナガ 「俺はちょっと。」

タケオ 「アホか。だから売れへんねん。」

サルー 「大丈夫よ、ノブナガちゃん。」

ノブナガ 「はあ？」

アヤノ 「しづくー！ー！」

しづく 「アヤノー！ー！」

アヤノ 「しづくと乾杯してるー。私しづくと乾杯してるー。もう一生できないと思ってたー。」

しづく 「私もー！もう一生は終わったけど、私もー！」

全員で宴が始まる

転

Σ15 シンプル*役者なし

Σ16 腐ったドーナツ(アヤノ・しづく)

(しづく)

あの日 一緒に食べた 覚えてる 喧嘩しながら あなたと食べた 空港のお店のまじいドーナツ
(アヤノ)

後悔の 味がして 全然 美味しく なかった どうして こんな空気に なっちゃったのかな

(しずく)

いつも そばにいるよ あなたが泣くとき 私も そばで悲しんでいるから そう 言いたかったのに

あのね

命はドーナツ くるくる回るドーナツ

回り回って やがて 腐っていくの

そう 命はドーナツ くるくる回るドーナツ

チョコレートがかかっている 幸せ ドーナツ

(アヤノ) 一人 旅に出ると 想像した以上にホントに いろんなところ あなたがいて もう 嬉しくなった

そうね

この世はドーナツ くるくる丸いドーナツ

真ん中に必ず 穴が 空いている

ああ この世はドーナツ くるくる茶色のドーナツ

甘い部分はそう とことん甘い

(アヤノ・しずく)

いつの日にか そう いつの日にか 会えるからね こうやって

この 場所から ほらね 私たち 繋がっているよ

いつの日にか みんな いつの日か 会えるからね 誰だって

そう この場所にいる 目に 見えないものを信じて すぐにほら・・・

転

しずくと住人たち

しずく 「じゃあね。」

アヤノ 「そっか……。うん！また！」

しずく 「またね！！」

アヤノ 「なんかあったら連絡して！」

しずく 「わかった！」

しずく 「じゃあね。」

しずく勢いよく出て行く

サルー 「さようなら、元気でね。」

しずく、戻ってくる

しずく 「忘れ物！」

サルー以外にはしずくの姿は見えていない

しずく 「サルーさん。大丈夫だからね。」

しずくは最後にサルーを抱きしめる。

いつもと変わらないシェアハウスのリビング。

ゆっくりとしずくは姿を消し、住人たちは日常に戻る。
物語は終わりを迎える。

発行元 せんすおぶわんだあ

発行日 2017年9月17日

ご利用について

作品の上演などについては、WEBサイトのコンタクトよりお問い合わせください。

著作権は せんすおぶわんだあ に帰属します。

*本書の内容は予告なしに改訂となる場合があります。

WEB サイト せんすおぶわんだあ

<https://www.sens-of-wonder.com>

Twitter

@Sens_of_wonder